

現代「地域教育計画」としての「うらほろスタイルふるさとづくり計画」

宮前 耕史

(北海道教育大学釧路校)

“The Urahoro-Style Community Creation Plan” as the Contemporary Community Education Plan

Yasufumi MIYAMAE

【要旨】

「うらほろスタイルふるさとづくり計画」(以下「うらほろスタイル」)とは北海道十勝郡浦幌町で持続可能な地域社会の実現を目指して展開される「地域づくり」「まちづくり」計画で、その最大の特徴は、将来の町の担い手である「子ども」をこそその取り組みの「軸」と位置付けて、子どもたちに「地域に対する自信と誇り」を芽生えさせ「地域への愛着」を育むことを目的に、学校・教師が中心となり、地域社会の多様な主体をつなぎつつ、学校・教員と地域住民との協働により、学校を舞台に正規の教育課程において取り組まれている点にある。

本稿では、その先進性や現代的意義について「地域教育計画」との観点から検討を加えた上で、「うらほろスタイル」をめぐる今後の研究課題について明らかにする。

はじめに

「うらほろスタイルふるさとづくり計画」(以下「うらほろスタイル」)とは北海道十勝郡浦幌町で持続可能な地域社会の実現を目指して展開される「地域づくり」「まちづくり」計画で、その最大の特徴は、将来の町の担い手である「子ども」をこそその取り組みの「軸」と位置付けて、子どもたちに「地域に対する自信と誇り」を芽生えさせ「地域への愛着」を育むことを目的に、学校・教師が中心となり、地域社会の多様な主体をつなぎつつ、学校・教員と地域住民との協働により、学校を舞台に正規の教育課程において取り組まれている点にある。

「うらほろスタイル」の草創期(平成19年(2007)~平成22年(2010))における成り立ちや、その現代的意義、「うらほろスタイル」から学ぶ北海道教育大学釧路校地域教育開発専攻地域教育分野の取り組みについてはすでに〔宮前2012〕〔宮前・添田2012〕〔添田・近江・中村・宮前・高木・今泉2013〕〔宮前・小林・栗本2013〕等に「地域に根ざした教師」「地域に根ざした学校」との観点から述べたことがあるが、本稿では、その後の「うらほろスタイル」の展開も踏まえ(平成23年(2011)~平成25年(2013))、改めてその成り立ちについて6つの時期に整理して概観し、その先進性や現代的意義について「地域教育計画」との観点から検討を加えた上で、「うらほろスタイル」をめぐる今後の研究課題について明らかにしておきたい。

以下、本稿では上記課題を達成するために、まず「うらほろスタイル」誕生の背景と、平成25年(2013)段階における取り組みや推進体制の全体像について改めて確認す

る。次に「うらほろスタイル」の成り立ちを6期に整理して概観し、その「地域づくり」「まちづくり」計画としての特徴を明らかにした上で、これを「地域教育計画」との観点から検討を加え、それが現代日本の地方地域社会、とりわけ農山漁村における「地域教育計画」の先進モデルと理解することができることを明らかにする。その上で、「うらほろスタイル」をめぐる今後の研究課題について述べる。

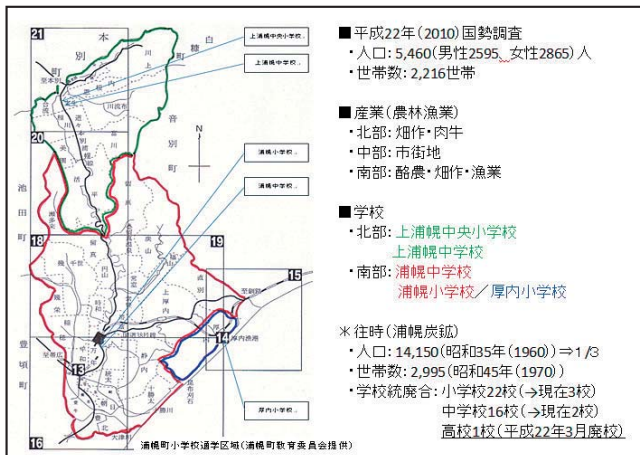
1. 「うらほろスタイル」誕生の背景と全体像

(1) 「うらほろスタイル」の背景—浦幌町の概要

浦幌町は人口5,460人・世帯数2,216世帯(平成22年(2010))、JR浦幌駅を中心に市街地が形成されており、その市街地を取り囲むように酪農・畑作地帯が広がり、町南東部には厚内漁港が所在する酪農・畑作・漁業の町である(【図1-1】)。

学校には小学校は3校、中学校が2校ある。【図1-1】中、赤く囲まれた部分、青く囲まれた部分はそれぞれ浦幌小学校、厚内小学校の通学区域である。厚内地区には厚内中学校があったが昭和55年(1980)3月に廃校となった。厚内小学校を卒業した子どもたちは、浦幌小学校を卒業した子どもたちと同様、市街の浦幌中学校へと進学する。また、緑で囲まれた部分が上浦幌地区である。上浦幌地区には上浦幌中央小学校と上浦幌中学校がある。上浦幌には平成22年(2010)まで上浦幌小学校があったが、同年3月廃校となった。上浦幌中央小学校と上浦幌中学校の通学区域は一致している。

統計上最も人口が多かったのは昭和35年(1960)頃で、

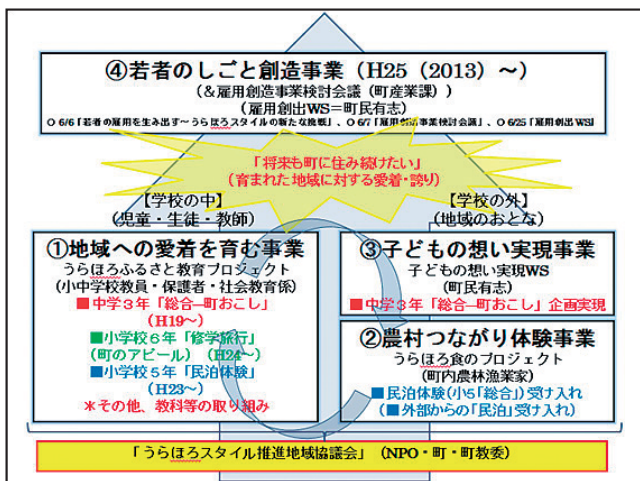


【図1-1】浦幌町概観

14,150人の人口があった。しかし現在はその3分の1にまで減少している。小・中学校も一番多い時でそれぞれ22校、16校があったが、統廃合を繰り返し、上記のように現在ではそれぞれ3校、2校になっている⁽¹⁾。高校には浦幌高校があったが、やはり平成22年(2010)3月、廃校となった。このことが「うらほろスタイル」誕生の大きな契機となったと考えられる〔宮前2012〕。

(2)「うらほろスタイル」の全体像

【図1-2】は、平成25年(2013)段階における「うらほろスタイル」における取り組みと、その推進体制の全体像をまとめたものである。



【図1-2】「うらほろスタイル」の取り組みと推進体制

中心となっているのは小・中学校の取り組み、「地域への愛着を育む事業」(①)である。小・中学校の教員と保護者、町教委社会教育係が「うらほろふるさと教育プロジェクト」を組織して進めている。中心となる取り組みとしては、町内全小学校5年生を対象に実施している「民泊体験」(総合的な学習の時間)⁽²⁾、中学校3年生がやはり「総合的な学習の時間」の一環として取り組んでいる「町活性化企画案発表会」がある。また平成24年(2010)より、小学

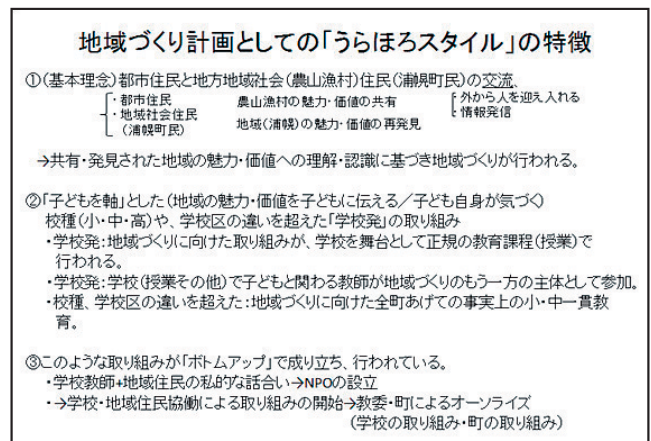
校5年生での「民泊体験」を踏まえ、翌年6年生になり修学旅行で札幌に行った際、駅周辺で行う「ふるさとうらほろの魅力PR活動」が開始されている。その他の教科との関わりも含め、日々地道な教育実践が展開されている。

2つ目に、小学校5年生の「民泊体験」に、その受け入れという形で協力を行っているのが町内農林漁業家有志組織「うらほろ食のプロジェクト」による「農村つながり体験事業」(②)、3つ目に、中学校3年生による「町活性化企画案」の提案を受け、その実現に向けて町内有志が検討を進める「子どもの想い実現ワークショップ」による「子どもの想い実現事業」がある(③)⁽³⁾。

従来、「うらほろスタイル」は上記3つの事業により取り組まれてきた。これらの取り組みにより確実に育まれてきた子どもたちの「将来も町に住み続けたい」という思い、子どもたちの間に育まれた地域に対する愛着・誇りに対し、大人がどう責任を引き受けていくかを考えた末に平成25年(2013)より開始されたのが「若者のしごと創造事業」(④)である(「若者の雇用創造事業検討会議」により推進される)。同会議では一般社団法人食品需給センターの協力を得、中学校卒業後の子どもたちの進路(キャリア)のあり方や地域資源の検証も経て、後に述べるような6つの雇用創造事業案を提案している。

2. 「うらほろスタイル」の特徴

さて、「地域づくり」「まちづくり」計画としての「うらほろスタイル」の特徴についてあらかじめ述べておかなければ、およそ以下のような点を指摘することができる(【図2-1】)。



【図2-1】「地域づくり計画」としての「うらほろスタイル」の特徴

まず第一に、都市住民と地域社会(農山漁村)の住民(浦幌町民)の交流により農山漁村(浦幌町)の魅力や価値が共有されて、これに基づき「地域づくり」「まちづくり」に向けた取り組みが行われるという点である。地域の外側からの視点を導入することは、地域住民(浦幌町民)にとっ

ては今まであまりにも当たり前すぎて気付かなかった、地域（浦幌）の魅力や価値を再発見していく契機となるものである。

第二の特徴は、地域の魅力や価値を子どもに伝える、あるいは子ども自身が気づくといった「子どもを軸」とした校種や学校区の違いを超えた「学校発」の取り組みであるという点である。より具体的に述べるなら、「地域づくり」「まちづくり」に向けた取り組みが、学校を舞台として正規の教育課程の中で、すなわち授業の中で行われているという点である。このことは、学校において授業その他で子どもたちと直接かかわる学校教員こそが、「地域づくり」「まちづくり」のもう一方の主体としてここに深く関わっていることを意味している。また、校種や学校区の違いを超えて取り組まれることにより、事実上の小・中一貫教育が行われていると理解することも可能であろう(4)。

そして第三に、このような「地域づくり」「まちづくり」の取り組みが、学校教員と地域住民との間における私的な懇話の中から生まれ、NPO法人が設立されて、それがやがては町や町教育委員会により学校・町の取り組みとしてオーソライズされていくという「ボトムアップ」により成り立ち、取り組まれているという点である。

以下では「うらほろスタイル」の「地域づくり」「まちづくり」計画としての特徴について理解するために、その成り立ちを6つの時期に分けて整理する。その上で、その先進性や現代的意義について「地域教育計画」論の立場から検討を加える。

3. 「うらほろスタイル」の成り立ち

(1) 第Ⅰ期：NPO法人「日本のうらほろ」の設立

【図3-1】は「うらほろスタイル」の成り立ちを、6つの時期に分けて概観したものである。また、【図3-2】～【図3-6】は、各時期における取り組みや活動を、時期ごとにより詳細にまとめたものである。

【図3-2】は、第Ⅰ期の取り組みをまとめたものであ

第Ⅰ期：NPO法人「日本のうらほろ」の設立 (平成18年(2006)10月～)				
年	事項(十勝毎日新聞社『浦幌メール』より)			
H18 (2006)	<p>○(10月)教師+地域住民による協議(PTA) ↓ 有志12名による町の活性化をめざすNPO法人「日本のうらほろ」設立 (「うらほろスタイル」の直接的契機)</p> <p>○NPO法人「日本のうらほろ」の理念・目的 ・「この町(浦幌)の魅力と価値」とに関する認識を「町のみならず」「都会の人たちとで共有し、「この町をみんなで支える」という気運を作る」と同時に「町が元気になる仕組みを作ること」 ・このことにより、「20年間に半減してしまった町の人口を増やすこと」[近江2010] *「地域の無事」(=「地域社会の持続可能性の実現」)</p> <p>○NPO法人「日本のうらほろ」の取り組み</p> <table border="1"> <tr> <td> <p>①浦幌魅力探検隊 魅力発見 ・料理コンテスト ・HP運営 ↓ *地域住民自身による 地域の魅力発見+発信</p> </td> <td> <p>②浦幌キッズ養成塾 ・学校との連携(給食・給水)を通じて子どもたちに浦幌の魅力を 実感してもらう取り組み ↓ *地域の魅力を子どもに 伝える/子どもが気づく</p> </td> <td> <p>③交流事業 ・町外からの移住体験受け入れ ・フォーラムの企画・運営 ↓ *地域の外の視点から 地域の魅力を発見</p> </td> </tr> </table> <p>■(12月)HP開設 ■(不明)第1回料理コンテスト (ジャガイモ編)</p> <p>■(10月)うらほろフォーラム2006 (基調講演:小堀修二)</p> <p>「うらほろスタイル」初発の段階 →3つの特徴</p>	<p>①浦幌魅力探検隊 魅力発見 ・料理コンテスト ・HP運営 ↓ *地域住民自身による 地域の魅力発見+発信</p>	<p>②浦幌キッズ養成塾 ・学校との連携(給食・給水)を通じて子どもたちに浦幌の魅力を 実感してもらう取り組み ↓ *地域の魅力を子どもに 伝える/子どもが気づく</p>	<p>③交流事業 ・町外からの移住体験受け入れ ・フォーラムの企画・運営 ↓ *地域の外の視点から 地域の魅力を発見</p>
<p>①浦幌魅力探検隊 魅力発見 ・料理コンテスト ・HP運営 ↓ *地域住民自身による 地域の魅力発見+発信</p>	<p>②浦幌キッズ養成塾 ・学校との連携(給食・給水)を通じて子どもたちに浦幌の魅力を 実感してもらう取り組み ↓ *地域の魅力を子どもに 伝える/子どもが気づく</p>	<p>③交流事業 ・町外からの移住体験受け入れ ・フォーラムの企画・運営 ↓ *地域の外の視点から 地域の魅力を発見</p>		

【図3-2】 第Ⅰ期：NPO法人「日本のうらほろ」の設立

る。平成18年(2006)10月、学校教員と地域住民とが私的な懇話をする中から、PTA有志により町の活性化を目指すNPOをつくろうという話がもちあり、それが「うらほろスタイル」の取り組みの直接的な契機となった。そのNPO法人が「日本のうらほろ」である。

NPO法人「日本のうらほろ」は、「この町(浦幌町)の魅力と価値」とに関する認識を「町のみならず」と「都会の人たち」とで共有し、「この町をみんなで支える」という気運を作る」と同時に「町が元気になる仕組みを作ること」、そしてこのことにより、「20年間に半減してしまった町の人口を増やすこと」[近江2010]、すなわち「地域社会の持続可能性の実現」を目指すことを理念・目的とした。

同時期における同法人の取り組みとしては、「浦幌魅力探検隊」、「浦幌キッズ養成塾」、「交流事業」があった。「地域の外」の視点も踏まえて地域住民自身が地域の魅力を発見し、それを子どもに伝える/子どもが気づくという、現在の「うらほろスタイル」に見られる3つの特徴を、すでにこの段階において見出すことができる。

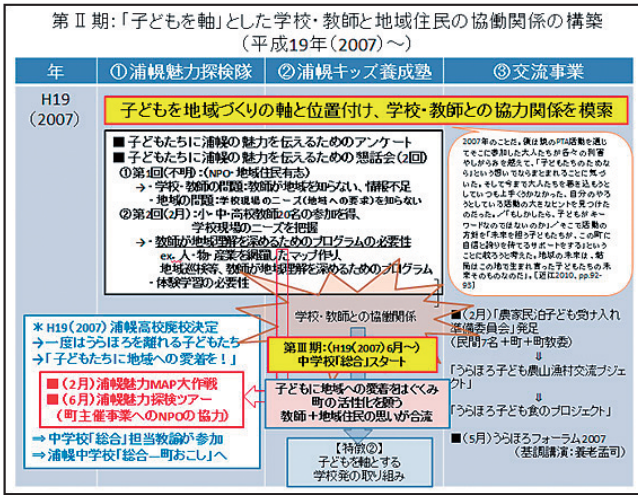
(2) 第Ⅱ期：「子どもを軸」としたに学校・地域住民の協働関係の構築

第Ⅱ期は、子どもを地域づくりの軸と位置付け、教師・学校と地域住民との協働関係を模索・構築していく時期である(【図3-3】)(5)。

同時期における同法人の活動としては、「子どもたちに浦幌の魅力を伝えるためのアンケート」、2回にわたる「子どもたちに浦幌の魅力を伝えるための懇話会」といったものがある。第1回の「懇話会」では、まず学校側の問題として、教員が地域を知らないのではないかということが課題になった。と同時にもう一方で、地域の側も学校側のニーズを知らないのではないかということが課題となった。こうした課題を踏まえて、第2回目の懇話会が開催された。小・中・高等学校の教員にも呼びかけたところ、20名の教員の参加が得られた。そこでは、たとえば地域の人や物・産業等を網羅したマップ作りといった、学校教員が地域を

「うらほろスタイル」の成り立ち(概略)	
■第Ⅰ期：教師+地域住民による協議(PTA)→町活性化:NPO法人「日本のうらほろ」設立(H18(2006)10月～)	①浦幌魅力探検隊 ②浦幌キッズ養成塾 ③交流事業
■第Ⅱ期：子どもを地域づくりの軸と位置付け、学校・教師との組織としての協働関係を模索・構築(H18(2006)～)	*教師へのアンケート/子どもたちに地域の魅力を伝えるための懇話会(2回)開催 ①(不明)→教師の地域に関する情報の不足、学校現場のニーズ(地域への要求)の把握の必要 ②(2月)小中高教師20名の参加(後、学校現場のニーズを把握) *教師が地産理解を深めるためのプログラムの必要性→(2月)「浦幌魅力MAP大作戦」 ・体験学習の必要性 ↓ (6月)「浦幌魅力探検ツアー」(町主催)
■第Ⅲ期：「うらほろスタイル」教育プロジェクト開始(学校・教師の組織としての本格的取り組みの開始)	*中学校(総合)1(H19(2007)6月)→浦幌町(H22(2010)3月)の府庁決定 →(9月)農林水産省「H19年度人づくりによる農村活性化支援事業」採択 →(9月)「うらほろスタイル」教育プロジェクト(協働)→町・教委の協力を得て、学校・教師の組織としての本格的取り組みが開始
■第Ⅳ期：「うらほろスタイル」推進協議会(設立)事業総整理再編→「うらほろスタイル」の成立(H20(2008)～)	①地域への愛着を育む ②子どもの想いを実現 ③農村つながり体験→教委・町による *H23(2011)4月「浦幌町第3期まちづくり」(基本)目標 「うらほろスタイル」を創出する教育・文化のまち *小学校5年「民白体験」(H23(2011)9月)
■第Ⅴ期：「うらほろスタイル」の新たな展開①	*「うらほろ」子どもの想いを実現(WS)開始(子どもの想いを実現事業)の抱い手(H24(2012)1月～) *「うらほろスタイル」教育推進協議会→「うらほろふるさと教育推進協議会」 ・小学校6年「総学習(町の町)」(H24(2012)10月～) ・町内全小中学校(5校)で取組みの整理・体系化が進められている
■第Ⅵ期：(「うらほろスタイル」の新たな展開②)	*「@着者のしごと」ボトムアップ(教師+地域住民)推進・実施体制としての子どもを軸とした「学校発」の取り組み
*成り立ちとしてのボトムアップ(教師+地域住民)推進・実施体制としての子どもを軸とした「学校発」の取り組み	

【図3-1】 「うらほろスタイル」の成り立ち (概略)



【図3-3】「子どもを軸」とした学校・教師と地域住民の協働関係の構築

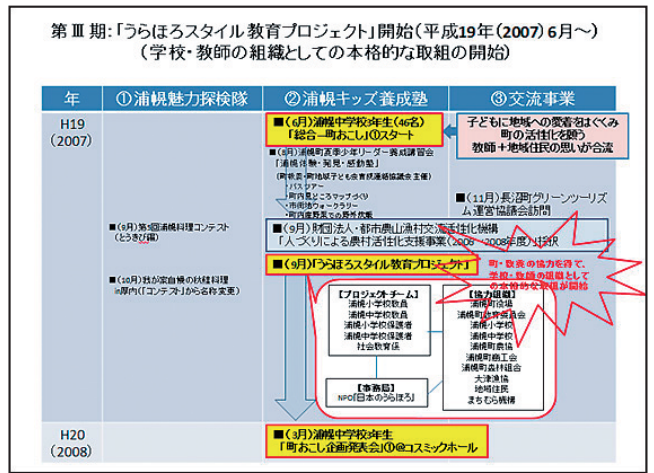
知るためのプログラムや、体験学習の必要性が話し合われたという。

こうした議論を経て実施されたのが、「浦幌魅力MAP大作戦」（2月）と「浦幌魅力探検ツアー」（6月）である。後者は町（博物館）主催事業へのNPO法人「日本のうらほろ」の協力という形で実施され、そこでは学校教員をバスに乗せて町内をめぐり、地域の魅力を体感してもらうことが目指された。

一方、学校教員がNPO法人「日本のうらほろ」のこうした取り組みに従属的に参加するのみであったかという、そうではない。学校教員も、そこに主体的に関与していく課題意識を持ち合わせていた。実はこの年、浦幌高校の平成22年3月いっばいでの廃校が決定している。浦幌高校が廃校になると、進学を目指す子どもたちは全員町を出て行くことになる。将来も町に帰ってくることもなくなってしまう可能性がある。そのようになる前に、子どもたちに地域に対する愛着を育てていく必要がある。こうした課題意識に基づいて、学校教員もNPO法人「日本のうらほろ」の取り組みに主体的に参加していた。こうした取り組みを踏まえ、平成19年（2007）6月には浦幌中学校の「総合的な学習の時間—町活性化企画案」の取り組みが開始されるが、それは、子どもに地域に対する愛着を育み町の活性化を願う、学校教員と地域住民の思いが合流したところに成り立つものであったのである(6)。

(3) 第Ⅲ期：「うらほろスタイル教育プロジェクト」の開始

第Ⅲ期は、「うらほろスタイル教育プロジェクト」が組織され、学校・教師の組織としての本格的な取り組みが開始された時期である（【図3-4】）。【図3-4】に見るように、同プロジェクトは浦幌町内全小・中学校の教員と町教育委員会社会教育係で「プロジェクトチーム」を組織して、町役場と教育委員会、全小・中学校と商工会、森林組合、漁協といった町内各種団体と地域住民、「まちむら機構」



【図3-4】第Ⅲ期：「うらほろスタイル教育プロジェクト」開始（平成19年（2007）6月～

といった町内外の各種団体を「協力組織」とし、NPO法人「日本のうらほろ」が事務局を担うという推進体制で取り組まれた。

一方、同年6月にスタートした浦幌中学校の「総合的な学習の時間—町おこし」は、これが9月に財団法人都市農山漁村交流活性化機構「人づくりによる農村活性化支援事業」に採択されたことから勢いを増し、翌平成20年（2008）3月には町コスミックホールにおいて第1回となる「町おこし企画案発表会」が開催された。

(4) 第Ⅳ期：「うらほろスタイルふるさとづくり計画」の成立

第Ⅳ期はNPO法人「日本のうらほろ」と町・町教委により「うらほろスタイル推進地域協議会」が設立されて、町・教委による本格的なバックアップ、推進体制が整えられる時期である（【図3-5】）。平成20年（2008）12月にはパンフレット『うらほろスタイルふるさとづくり計画』が作成・配布されるが、ここでは①浦幌魅力探検隊、②浦



【図3-5】第Ⅳ期：「うらほろスタイルふるさとづくり計画」の成立

幌キッズ養成塾、③交流事業という従来の3つの取り組みも、①「うらほろスタイル教育プロジェクト」による地域への愛着を育む事業、②協力組織による「子どもの想い実現事業」、③うらほろ子ども農山漁村交流プロジェクトによる「農村つながり体験事業」へと再編・整理されている。

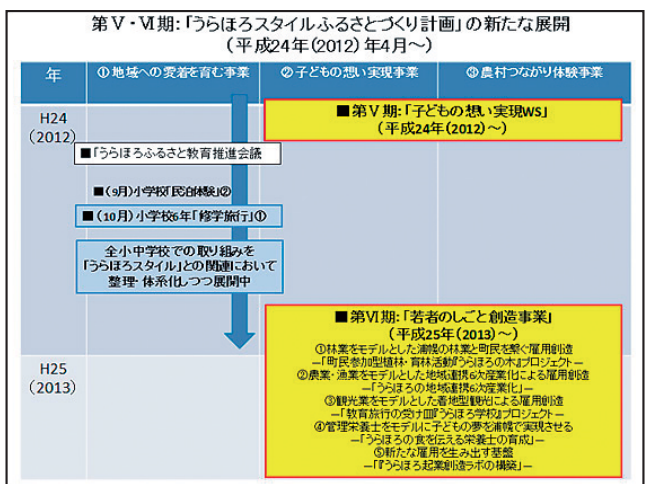
平成23年(2011)4月には『浦幌町第3期まちづくり計画』が発表されたが、その基本目標③として「うらほろスタイルを創出する教育・文化のまち」を目指すことが明記された。このことは、「うらほろスタイル」が行政によりオーソライズされ、町の正式な取り組みとして位置付けられたことを意味している。

以降「うらほろスタイル」では、小・中学校の取り組み、すなわち「地域への愛着を育む事業」を軸として、取り組みを展開していくことになる。また、これを推進する「うらほろスタイル教育プロジェクト」では、現在にいたるまで、各小・中学校における取り組みを、各教科における取り組みも含めて「うらほろスタイル」との関連において整理・体系化し、町内全小・中学校の義務教育課程9年間を貫く一貫した取り組みとしていくことが目指されている。

同時期、平成23年(2011)9月には、第1回となる小学校5年生による「民泊体験」が実施されている。また、12月にはこの年で5回目となる浦幌中学校「総合的な学習の時間」における「町活性化企画案発表会」が行なわれている。

(5) 第V期：「子どもの想い実現ワークショップ」

従来における「うらほろスタイル」の取り組みの成果を踏まえ、新たな展開を迎えたのが第V期および第VI期である(【図3-6】)。



【図3-6】 第V・VI期：「うらほろスタイルふるさとづくり計画」の新たな展開

第V期には、浦幌中学校3年生「総合的な学習の時間」において提案された「地域活性化企画案」を整理し、その実現の可能性を探る「子どもの想い実現ワークショップ」が結成された。同ワークショップでは月1回2時間程度の会合をもち、町内各種団体とも相談しながら中学生たちか

ら提案された「地域活性化企画案」を整理・実現している。

【表3-1】は、平成19年(2007)より平成25年3月現在までの、中学校3年生から提案された町活性化企画案と、「子どもの想い実現ワークショップ」によりすでに実現された企画の一覧である。

(6) 第VI期：「若者のしごと創造事業」の開始

第VI期には、新たな取り組みとして「若者のしごと創造事業」が開始された(【図3-7】)。



【図3-7】 「若者のしごと創造事業」(うらほろスタイル推進地域協議会提供)

従来、「うらほろスタイル」はすでに述べた①地域への愛着を育む事業、②農村つながり体験事業、③子どもの想い実現事業の3つの取り組みにより展開・発展してきた。これらにより確実に育まれてきた子どもたちの「将来も町に住み続けたい」という思い、子どもたちに育まれた地域に対する愛着・誇りに対し、大人が責任を取っていくために平成25年(2013)より開始されたのが、「若者の雇用創造事業検討会議」により推進される「若者のしごと創造事業」である。同会議では一般社団法人食品需給センターの協力を得、中学校卒業後の子どもたちの進路(キャリア)のあり方や地域資源の検証も経て、下記6つの雇用創造事業案を提案している〔うらほろスタイル推進地域協議会若者の雇用創造事業検討会議2014〕。

- ①林業をモデルとした浦幌の林業と町民を繋ぐ雇用創造—「町民参加型植林・育林活動『うらほろの木』プロジェクト
- ②農業・漁業をモデルとした地域連携6次産業化による雇用創造—「うらほろの地域連携6次産業化」
- ③観光業をモデルとした着地型観光による雇用創造—「教育旅行の受け皿『うらほろ学校』プロジェクト
- ④管理栄養士をモデルに子どもの夢を浦幌で実現させる—「うらほろの食を伝える栄養士の育成」
- ⑤新たな雇用を生み出す基盤となる〔『うらほろ起業創造ラボ』の構築〕

企画案一覧

【表3-1】浦幌中学校3年「総合的な学習の時間―町おこし企画案一覧表」(平成19年度(2007)～平成25年度(2013))					
年度	企画名	企画内容	場所	備考	
H19年度	1	ハマナスの活用	ハマナスの実のシュークリーム(『ハマナシュー』)をつくる	浦幌町のケーキ屋さん パン屋さん	ハマナスPJ
	2	NEW特産品	ハマナスの実の紅茶(『奥様のPM1時半』)とジャム(『ピタBOM』)をつくる	道の駅	ハマナスPJ
	3	ミルクラーメン	浦幌の食材でミルクラーメンをつくる	浦幌の飲食店とネット販売	浦幌ミルク麺
	4	スポーツフェスティバル	町外から参加者を募り、野球やサッカーなどの大会を浦幌町内で一日かけて行う	・サッカー: 森林公園、健康公園 ・野球: 浦幌町営球状 ・バレー: 総合体育館、小・中学校 ・パークゴルフ: 森林公園	進行中
	5	クッキングフェスティバル	町外から多くの人がかかるみのり祭りで浦幌の特産物や野菜を使った料理を食べてもらう	みのり祭り	進行中
	6	純国産万年筆計画	川流布地区モカワルupp川沿いで採掘できるイリジウム(レアメタル)で純国産万年筆をつくる		
	7	うらぼろ道の駅	「浦幌道の駅」を設置する	うらぼろ亭の裏にある テストコートを改造	実施済み
	8	流木作品展示即売会	浦幌に流れ着いた流木を集めて業者や希望者に流木アートをつくってもらい、それらの作品を展示会で販売する	コスミックホール、公民館	実施済み
	9	ふるさとみのり祭りの改良	・歌謡ショー: 老若男女が楽しめる歌手を呼ぶ ・みのりまき: 大人の部と子どもの部に分ける ・施設: ふわふわドームの導入、机と椅子を増やしてシルバーシートを設置 ・ステージ: 特産品を調理してステージ上でアピール、屋台の宣伝をステージでおこなう	みのり祭り	実施済み
	10	森林公園大改造計画	・池: 清掃して子どもたちが遊べるようにする ・ウサギ小屋: 改築して子どもたちがウサギを抱けるようにする ・キャンプ場: ハマナスを植える ・スキー場: 大きなすべり台をつくる	森林公園	
	11	浦幌新聞	浦幌の行事・特産品・施設やオススメスポット・お店などの紹介を書き、年に4回発行する。町民は回覧板、町外は新聞にはさむ	浦幌と近隣の町	進行中
	12	町のキャラクターづくり	ナナカマドやアオサギやハマナスをモチーフに浦幌町のキャラクターをつくる		実施済み
H20年度	13	URAHORON	バイアスロン形式の競技を行い厚内の海産物と浦幌の特産品をPRする		進行中
	14	かぼちゃのあんぱん	浦幌産のかぼちゃであんぱんをつくる		商品化
	15	ハマナスジャム・ハマナス弁当	・浦幌牛乳とハマナスジャムでヨーグルト(?)をつくる(『牧場の恵み』) ・上浦産豆と厚内産ししゃも等々でハマナス弁当をつくる		ハマナスPJ
	16	サクサクパン プリンタルト	浦幌の牛乳とかぼちゃでサクサクパンとプリンタルトをつくる		
	17	浦幌酪農体験ツアー	東京と帯広の人たちにアイス、バター、そして生キャラメルをつくってもらい、浦幌の自然を楽しんでもらう		
	18	うらまん	ハマナスジャムを皮に練りこみ、浦幌産の小豆をあん(にしてまんじゅうをつくる		ハマナスPJ
	19	しゃっこい祭り	野菜掘り		冬のイベント
	20	ウラホロズ キャラクターシール	うらはとほろまのキャラクターシールをつくる		商品化
	21	浦幌美食フェア	三ヶ月に一回行い、その季節の旬な食べ物を売る		
	22	エゾバイを使った料理	エゾバイの味噌汁、うらぼろ満載カレー		浦幌ミルク麺
	23	浦幌ラフティングツアー	浦幌川でラフティング→浦幌健康湯→浦幌川でキャンプ→月ごとで異なるイベント	浦幌川	
	24	浦幌百人一首	百人一首で遊びながら浦幌の魅力を多くの人に知ってもらう		試作品有り
	25	留真温泉増築計画	宿泊施設を改築してコテージを増築する		
	26	ウラパズ	ストローパズで木造おもちゃ(立体パズル)をつくる	道の駅、インターネット販売	試作品有り
	27	スイートパンブキン	浦幌産のかぼちゃでスイートパンブキンをつくる	道の駅	
	28	かぼばん	浦幌産のかぼちゃでかぼばんをつくる		商品化

H21年度	29	ベジニョッキ	浦幌産の牛乳と野菜でポタージュ煮込みのニョッキをつくりレトルト販売する	道の駅	浦幌ミルク麺
	30	浦弁	浦幌産の昆布と鮭でお弁当をつくる		実施済み
	31	カラマツ入浴剤		道の駅、留真温泉	試作品有り
	32	タコんぶライス	浦幌産のタコと昆布で商品をつくる		実施済み
H22年度	33	浦幌の町に科学館を！！	<ul style="list-style-type: none"> 子どもから大人まで楽しんでもらえるような科学展示室を設置する 学校では行わない科学実験を行う 浦幌炭坑をイメージした炭坑トンネルをつくる 	森林公園の農村改善センター	
	34	留真温泉にフラワーロードをつくらう！	<ul style="list-style-type: none"> 留真温泉に続く道のりに花を植えてフラワーロードをつくる 温泉の前にうらはとほろまの看板を設置する 秋には紅葉、冬にはイルミネーションで季節感を持たせる 東屋への道のりに花を植える 	留真温泉	
	35	浦幌町合宿地化	浦幌町にはたくさんスポーツ施設があるので合宿地にして町の自然の豊かさを知ってもらおう	農村環境改善センターを改築	
	36	うるしんミスト	留真温泉の水で化粧水ミストをつくる	留真温泉	
	37	うるしんアイス	留真温泉の水でアイスをつくる	留真温泉	
	38	海上打ち上げ花火大会	<ul style="list-style-type: none"> パラグライダー発着所を会場に海上げ花火大会を開催 花火大会の際には屋台を出して浦幌の特産品を楽しんでもらう 	パラグライダー発着所	
	39	トロッコ復元計画	炭坑跡地にトロッコをつくって体験型スポットにする	炭坑跡地	
	40	浦幌の自然にアスレチックを	留真温泉付近に誰でも自然を楽しめるアスレチック(ボルダリングやターザンロープ)を設置する		
	41	浦幌で採れる黒曜石を加工品に	黒曜石でストラップやお守りや数珠などをつくる	インターネット販売	
	42	留真温泉に手湯&足湯を♪	留真温泉の坂を上ったところにある東屋に、浦幌のカラマツを使用した手湯と足湯を設置する	留真温泉	
	43	Ocean's Illumination魅せる海	<ul style="list-style-type: none"> パラグライダー発着所にイルミネーションを設置して楽しんでもらう カラマツでつくった休憩所で浦幌町の食材を使用した軽食を用意する 	パラグライダー発着所	
	44	～青に瞬く光の線～	<ul style="list-style-type: none"> パラグライダー発着所を日の出撮影スポットにする 正月時期には浦幌産素材を使用したお汁粉やお雑煮などを販売する店を出す 	パラグライダー発着所	
45	留真温泉ツアー	<ul style="list-style-type: none"> みのり祭りツアーで留真温泉に連れて行く 夏休みキャンプツアー：農業体験、留真川で釣り、BBQ、カラマツで箸づくり、浦幌産野菜でピザづくり、ウォークラリー、そばづくり 	留真温泉		
H23年度	46	駅前ウラハ・ホロマいっぱい大作戦	<ul style="list-style-type: none"> ウラハ・ホロマの顔出しパネルの設置 名所を紹介する看板の設置 旅ノートの設置 	JR浦幌駅	進行中
	47	駅の中に売店を置き駅の雰囲気明るくしよう	<ul style="list-style-type: none"> パンを販売する ウラハ・ホロマグッズの販売 本の貸し出し 	JR浦幌駅	うらは・ほろまのパン商品化
	48	石のオブジェ作成	ウラハ・ホロマの石のオブジェを作成	JR浦幌駅	進行中
	49	おおみや復活大作戦	子どもに人気のあったおおみやを復活させる	JR浦幌駅	
	50	駅前冬祭り大作戦	<ul style="list-style-type: none"> 特産品の販売や雪だるまコンテスト、雪合戦等を行う 夏まつり形式にする 	JR浦幌駅	冬のイベント
	51	駅前に出店しよう	<ul style="list-style-type: none"> 土日にパンやクッキー、ハンバーガーを販売する店を出す 国道に浦幌駅を紹介する看板を設置する 	JR浦幌駅	
H24年度	52	浦幌まんぷくツアー	<ul style="list-style-type: none"> 浦幌の特産である、いもと牛乳を使ってじゃがバターとピザを作る うらはほろま探しやピザコンテストを行う 	浦幌町全域	進行中
	53	浦幌特産品改名改革	今ある特産品を改名することで、インパクトを与えて印象に残ってもらうようにする	道の駅など	
	54	レトルトUBS計画	道の駅とインターネットで、浦幌の特産品を使ったレトルトのピーフシチューを販売する。	道の駅 インターネット	
	55	ハマナスのローズヒップで地域活性化	<ul style="list-style-type: none"> 町の花を使い浦幌町をアピールする パンやジャムなどいろいろなものを作る 	道の駅など	ハマナスPJ

	56	森林公園リニューアル計画	・森林公園を明るい雰囲気にして有効活用する ・桜や銀杏、紅葉の気を植えて華やかに	森林公園	
	57	ベリーベリーラズベリー	・シェイクやゼリー、ケーキなどで活性化させる ・道の駅のラズベリーコーナーを拡大する	道の駅	
H25年度	58	浦幌の冬も楽しいぞ！！ Beefフェスタ	・森林公園で雪まつりをする ・雪合戦、雪像コンテスト、そりりレー、かまくら作りなど ・牛を使った新料理を作る ・雪は小原軽運送さんや、帯広貨物自動車株式会社さんなどに依頼する	森林公園	
	59	足の疲れをFOOT BATH	・道の駅に寄った際に気軽に留真温泉のお湯を利用してもらいたいということで、道の駅に足湯を設置する ・浦幌林業などにボランティア協力する ・お湯は留真温泉からタンクで運んでくる	道の駅	
	60	浦幌、ラズベリー町への道	・浦幌の特産品であるラズベリーを使って新商品を開発する ・ラズベリーを活用したパンケーキやゼリーを作る	道の駅	
	61	NEW 浦弁計画！！	・魚介類以外の浦幌の食材をもっとたべてもらいたい ・シカ肉をメインとして、卵や山菜などを使用する ・予約注文として受け付ける ・鹿肉は工藤板金さんに、山菜は道の駅で販売している方に協力を依頼する	道の駅	
	62	道の駅DEウラLOVE2900% ～WITHモンブラン～	・食糧自給率が2900%の浦幌町から発信したい ・じゃがいもの販売コーナーの新設 ・白花豆とラズベリーのモンブランの販売 ・じゃがいもコーナーは道の駅横にプレハブを設置	道の駅	
	63	ウラベチーノ	・十勝にはスタバのような専門店が無い ・浦幌の特産品を使った新商品の開発 ・コーヒーとラズベリークッキーと浦幌牛乳を使用	道の駅	
64	浦シュランガイド ～浦幌の"すべて"教えます～	・特産品、観光スポット、お店などのランキングや生産者の方々の思いを紹介する冊子を作成する ・役場の広報部、地域振興課、浦幌印刷に協力依頼する	町内全域		

(うらほろスタイル推進地域協議会提供)

一方、同時期には「地域への愛着を育む」事業もバージョンアップを遂げている。平成24年度(2012)には、浦幌小学校と厚内小学校の6年生が、5年生で実施した「民泊体験」の成果をふまえ、修学旅行先の札幌大通地下歩行空間で、浦幌町の魅力をアピールする取り組みを実現している。

4. 現代版「地域教育計画」としての「うらほろスタイル」

以上、「うらほろスタイル」の成り立ちについて、6つの時期に分けて概観してきた。次に、「うらほろスタイル」の取り組みの先進性や現代的意義について「地域教育計画」論の立場から検討を加える。

(1) 「地域教育計画」について

「地域教育計画」とは「教育計画」の一つで、対象となる地域や策定主体により、国による「中央教育計画」、都道府県による「地方教育計画」、そして、地方自治体やさらに狭いエリアにおいて住民・教師によって策定される「地域教育計画」がある(【図4-1】)。「地域教育計画」の系譜は、第二次世界大戦後、アメリカのコミュニティ・スクール部門で推進されていた地域教育計画に由来すると言われており、学校におけるカリキュラム計画の側面が強く、社会課題が重視されたのが特徴である〔葉養1990、pp.127-

「地域教育計画」としての「うらほろスタイル」

(1) 「地域教育計画」: 「教育計画」の一つ
 ・対象となる地域: 策定主体により
 「中央教育計画」: 国
 「地方教育計画」: 都道府県
 「地域教育計画」: 地方自治体またはその一部、住民・教師による計画

(2) 系譜
 ・第二次世界大戦直後、「教育の民主化」を理念とし、アメリカ合衆国のコミュニティ・スクール(地域社会学校)運動にならうと推進された地域教育計画。
 ・(学校)カリキュラム計画としての側面が強く、社会課題が重視された。
 ・単に学校と社会との壁を薄くし、取りあおうとする近年のコミュニティ・スクールとは系譜を異にする。
〔葉養1990、pp.127-128〕

(3) 本郷地域教育計画(大田町)
 ・昭和22年(1947)～24年(1949)、広島県本郷町本郷小学校区
 ・教育と地域住民とで「懇話会」を組織⇒共同地域調査により地域課題を発見
 ・その課題解決に向けて学校教育(カリキュラム)を再編(子どもの学習活動を地域課題解決の一環として再編)
〔福井2005〕

※ 地域教育計画
 ・地方自治体またはその一部を範囲とし、
 ・住民+教師の共同により、地域課題の発見・解決をめざし行われる
 ・学校発の「地域づくり」・学校カリキュラム改革

※ 地方地域社会(北海道の農山漁村)における地域課題とは何か?

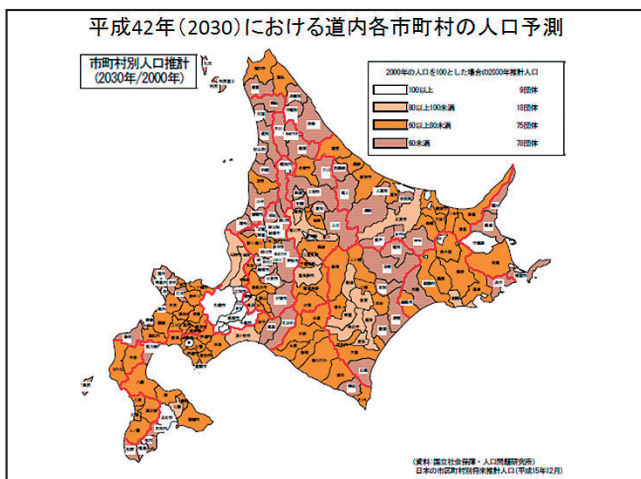
【図4-1】「地域教育計画」としての「うらほろスタイル」

128〕。日本国内における「地域教育計画」として、とりわけ著名なものに太田堯による「本郷地域教育計画」がある。これは昭和22年(1947)から24年(1949)頃の2年間にかけて、広島県の本郷小学校区において取り組まれたもので、ここでは、教員と住民とで教育懇話会を組織して、共同地域調査により地域課題を発見し、その課題解決に向けて学校におけるカリキュラムを編み直していくことが試みられた。

学校における子どもの学習活動を、地域課題の解決に向けた取り組みの一環として編み直していくというが行なわれたのである。

(2) 現代農山漁村における地域課題

【図4-2】は、平成42年(2030)における道内各市町村の人口を予測したものである(2003年、国立社会保障・人口問題研究所)。平成12年(2000)の段階における道内各市町村における人口を100として、その30年後、平成42年(2030)における人口を、60%未満まで減少、60%~80%未満まで減少、80%~100%未満まで減少、100%以上に増加の段階に分け、色分けして図示している。これを見ると、人口増加が見込まれるのは札幌・函館等大都市周辺の市町村、道東であると中標津町のみであり、多くの市町村で大幅な人口減少が予測されている。浦幌町の場合にも60%未満までの減少が見込まれているが、それは浦幌だけの問題だけではなく、北海道全体の農村漁村全体の問題であると言うことができよう。

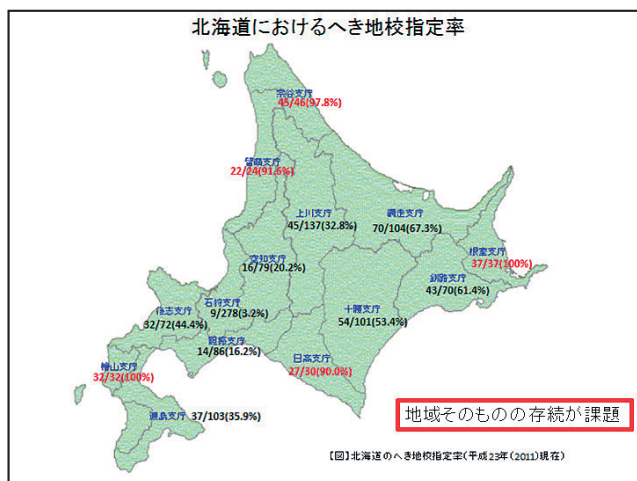


【図4-2】平成42年における道内各市町村の人口予測

一方、【図4-3】は、平成23年(2011)段階における北海道各支庁管内のへき地校指定率である。赤文字は90%以上の小・中学校が僻地校指定を受けている支庁である。うち、根室、宗谷、檜山では100%がへき地校指定を受けている。現代日本の北海道を含む地方地域社会、農山漁村では、地域そのものの存続が課題となっていることが分かる。

(3) 現代「地域教育計画」の農山漁村における先進モデルとしての「うらほろスタイル」

すでに述べたように「うらほろスタイル」の最大の特徴は、持続可能な地域社会の実現という地域課題の解決を目指し、将来の町の担い手である「子ども」をこそその取り組みの「軸」と位置付けて、子どもたちに「地域に対する自信と誇り」を芽生えさせ「地域への愛着」を育むことを目的に、学校・教師が中心となり、地域社会の多様な主体



【図4-3】北海道におけるへき地校指定率

をつなぎつつ、学校・教員と地域住民との協働により、学校を舞台に正規の教育課程において取り組まれている点にある。このように考えてくると、持続可能な地域社会の実現という地域課題の解決を目指し、学校・教師と地域住民との協働により、学校における子どもの学習活動(カリキュラム)を編み直していく「うらほろスタイル」は、現代地方地域社会・農山漁村における「地域教育計画」の先進モデルと考えることができるのである。

おわりに

以上、本稿では「うらほろスタイル」の成り立ちについて6つの時期に区分して概観し、その先進性や現代的な位置について「地域教育計画」との観点から検討を加え、「うらほろスタイル」を、現代日本の地方地域社会、農山漁村における「地域教育計画」の先進モデルととらえることができることを述べてきた。以下では本稿結びにかえて、「うらほろスタイル」をめぐる今後の研究課題について述べておきたい。

まず第一に、学校内における取り組み、すなわち「地域への愛着を育む事業」の一環として町内の各学校において取り組まれる個々の取り組み(授業実践)の同時代的な意義・先進性や、それらが子どもたちや地域社会、地域の人々や教員の意識に対して与えた具体的な成果や効果を明らかにする必要がある。たとえば(注2)にも述べたように、浦幌町の子どもたちが小学校5年生で行う「民泊体験」とは、町内農林水産漁業家宅において、子どもたちが1泊2日の宿泊を伴う第一次産業体験をするというもので、ここでは「山の子は海へ、海の子は山へ」というように、子どもたちが普段とは異なる生活・生産環境に接することができるよう工夫が凝らされている。「民泊体験」あるいは「農山漁村宿泊体験」については、体験的学習を含む都市農山漁村交流、グリーンツーリズム、農山漁村の多面的機能等といった面から注目されかつ論じられ、実施展開が進んでいるものの、子どもが自らの居住する地で「民泊体験」

を行うという事例は寡聞にして知らない〔鈴木2013〕。浦幌では「民泊体験」を通じ、子どもたちの地域に対する自身や誇り、愛着が確実に育まれていると感じるが、と同時に子どもと大人、大人同士のみならず、子ども同士の間でも、互いの生活・生産環境に対する理解が進み、信頼関係が育まれていると聞かれる。このような個々の取り組みの同時代的な意義・先進性や、子どもや地域社会、地域の人々そして教員の意識に対して与えた成果・効果や影響について、個別具体的に検証していく必要がある。

また、これら個別の具体的な取り組みの蓄積としての小・中学校の義務教育課程を貫く「地域への愛着を育む事業」の取り組みが、子どもたちや地域社会に対してどのような成果・効果を生み出し影響を与えていくことになるのか、長期的な視野から検証・検討を加えていく必要があるであろう。

第二には、「うらほろスタイル」は、子どもたちの成長とともに立ち現れる新たな局面や課題に対応しながら、常に萌芽的な取り組みを内包しつつ発展・展開をし続けている。事実、「若者のしごと創造事業」は、従来の「うらほろスタイル」の取り組みを踏まえ、その成果として確実に育まれてきた子どもたちの地域に対する誇りや自信・愛着、そして「将来も町に住み続けたい」という思いに対し、大人たちがどう責任を引き受けていくかというところから生まれた取り組みであった。また本文中に触れることはできなかったが、従来取り残されていた高校生世代に対する取り組みも、新たな住民層や年代層を巻き込みながら計画が進行している。まさに「浦幌は子どもの位置付けが違う」のであり、そこにあるのは「町全体が集団的に発達していく」というイメージである（〔添田・近江・中村・宮前・高木・今泉2012〕における今泉発言）。

ここには、子どもの位置付けをめぐる、ロジャー・ハートの言う「子どもの参画」以上の意味があるように思えてならない〔ロジャー・ハート著、木下・田中・南監修、IPA日本支部訳2000〕。上記のような萌芽的な取り組みの成果や効果・影響の長期的な検証・検討もさることながら、このような「子どもを軸」とした「うらほろスタイル」の「まちづくり」「地域づくり」の手法についても、学としてどのように位置付け、とらえていくことができるのか。これをとらえていくことのできる枠組みの構築が必要である。

そして第三に、これは「うらほろスタイル」をめぐる研究課題というよりも、大学の地域貢献、あるいは大学と地域の協働上の課題であると言えようが、一方では上記のような課題について検討・検証しながらも、大学とりわけ「へき地・小規模校」教育をその特色としてうたうわが国最大の農業地域に位置する教員養成大学として、その取り組みから学びつつ、その発展にどう貢献していくことができるのか、絶えず考え続けていくことが課題であると考えられる。

【注】

⁽¹⁾浦幌町における学校統廃合の詳細な状況については〔宮前2012〕参照。

⁽²⁾「うらほろスタイル」において実施されている町内全小学校5年生を対象とした「民泊体験」とは、町内農林水産漁業家宅において、子どもたちが1泊2日の民泊を伴う第一産業体験をするというものである。毎年9月上旬、町内すべての小学校において同一の日程で実施され、「山の子は海へ、海の子は山へ」というように、普段とは異なる生活・生産環境に接することができるよう工夫が凝らされている。

⁽³⁾後に述べるように、ここからは、【表3-1】のような成果が得られている。

⁽⁴⁾平成23年（2011）7月、「学校運営の改善の在り方等に関する調査研究協力者会議」は提言「子どもの豊かな学びを創造し、地域の絆をつなぐ～地域とともにある学校づくりの推進方策」において、「今後、すべての学校が、小・中学校の連携・接続に留意しながら、地域の人々と目標（子ども像）を共有し、地域の人々と一体となって子どもたちをはぐくんでいく『地域とともにある学校』を目指すべきである」として、その実現に向けた「学校と地域の人々との間での目標の共有」や「協働」の必要性を訴えた。その上で、「子どもを中心に据えた学校と地域の連携」（＝「協働」）が、「子どもの育ちにとどまらず、大人たちの学びの拠点を創造し、地域の絆を深め、地域づくりの担い手を育てることにつなが」っていくこと、そしてこのことにより学校は、「学校の課題にとどまらない地域の課題を解決するための『協働の場』『地域づくりの核』とな」っていくことの必要性と可能性を訴えた。いわゆる『新しい公共型』学校であるが、すでに浦幌町では「うらほろスタイル」を通じ、学校と地域住民との「協働」に基づく「地域とともにある学校」「新しい公共型」学校が実現している、あるいは実現しつつあると理解することも可能である。このような観点から、「うらほろスタイル」における学校運営のあり方や、学校・地域連携のあり方をとらえていく必要があると考える。

⁽⁵⁾「2007年のことだ。僕は娘のPTA活動を通じてそこに参加した大人たちが各々の利害やしがらみを越えて、『子どもたちのためなら』という想いでならまともされることに気づいた。そして今まで大人たちを巻き込もうとしていつも上手くいかなかった、自分のやろうとしている活動の大きなヒントを見つけたのだった。／『もしかしたら、子どもがキーワードなのではないのか』／そこで活動の方針を『未来を担う子どもたちが、この町に自信と誇りを持てるサポートをする』ということに絞ろうと考えた。地域の未来は、結局はこの地で生まれ育った子どもたちの未来そのものなのだ」〔近江2010、pp.92-93〕。

⁽⁶⁾この年の浦幌中学校「総合的な学習の時間―町活性化企画案」の取り組みの年間スケジュールについては〔宮前2012〕参照。

【参考文献】

- ・うらほろスタイル推進地域協議会若者の雇用創造事業検討会議2014『浦幌の子どもたちのために 雇用創出について考える～今、私たちがすべきこと』うらほろスタイル推進地域協議会
- ・近江正隆2010『だから僕は船をおりた 東京生まれの元漁師が挑む、フードアクション!』講談社
- ・学校運営の改善の在り方等に関する調査研究協力者会議2011『子どもの豊かな学びを創造し、地域の絆をつなぐ～地域とともにある学校づくりの推進方策』
- ・鈴木源太郎編著2013『農山漁村宿泊体験で 子どもが変わる 地域が変わる』農林統計協会
- ・添田祥史・近江正隆・中村吉昭・宮前耕史・高木秀人・今泉博2013「地域教育のこれからと教師・学校の役割」北海道教育大学釧路校ESD推進センター『ESD・環境教育研究』第15巻第1号
- ・葉養正明1990「地域教育計画」細谷俊夫他編集代表『新教育学大事典』第5巻、第一法規
- ・福井雅英2005『本郷地域教育計画の研究—戦後改革期における教育課程編成と教師』学文社
- ・宮前耕史2012「『うらほろスタイルふるさとづくり計画』の成り立ちとその現代的意義—「地域に根ざした学校」論・「地域に根ざした教育」論の立場から—」北海道教育大学学校・地域教育研究支援センターへき地教育研究支援部門『へき地教育研究』第67号、pp.31-54
- ・宮前耕史・小林可奈・栗本由佳2013「『うらほろスタイル』から学ぶ地域教育開発専攻・地域教育分野の『地域創造型教師』の取り組み」北海道教育大学釧路校研究紀要『釧路論集』第45号
- ・宮前耕史・添田祥史2012「地域に根ざした教師養成のためのプログラム開発—『地域参加型マインド』から『地域創造型マインド』へ—」北海道教育大学釧路校研究紀要『釧路論集』第44号
- ・ロジャー・ハート著、木下勇・田中治彦・南博文監修、IPA日本支部訳2000『子どもの参画—コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』萌文社